

——僕って、Sっ気あるみたいだ……。

圭祐は指をいったん抜き、三本揃えて突き入れる。熱いゴムのようになつるつるの腸壁が押し寄せてくる感触を楽しみながら、指をぐりつ、ぐりつとまわし奥へ奥へと押しこむと、みちるの身体がブルブルツと震える。

スカートで隠しているのに、圭祐の位置からだと拡張途中のアヌスは見えない。だが、みちるが苦しがつている様子にたまらなく興奮してしまう。

第二関節まで沈めた指をばらばらに動かして直腸粘膜をかきむしり、真面目な委員長をよりいっそういじめていく。

「くっ、い、痛いっ、くっ」

ふと気づいた。横に立つOLが二人を見て、目のやり場に困ったとばかりに視線をゆらゆらさせている。うらやましそうに圭祐を見ている会社員もいる。

今初めて気づいたが、通勤電車のなかを、妙な緊張感が支配していた。

圭祐は、指をそっと抜き、みちるの背筋をもう片方の指先でつつと撫であげた。

この子は僕のものだとアピールするような仕草だった。

「ああっ！」

みちるがぐっと上半身を折り、腰が圭祐に向かって突きだされた。抜いた指が秘



裂に沿って前へとすべり、指先が秘芽を押した。

「うっ!!」

ジョツと音がして、指が熱くなった。

アンモニア臭が立ち昇り、ショーツがじゅくじゅくに濡れていく。

——えっ、ええっ、な、なにが起こったんだ？

「……っ、んっ、んんんっ」

——い、いやいやっ、とまってっ。とまってよおっ……。

みちるは、下腹に力を入れ、尿をとめようと必死になっていた。我が身に起こっていることが信じられない。

——私、私、電車のなかで、お漏らしをしてる……。

直腸のなかに指を入れられると、膀胱ぼうこうが圧迫されて尿意が極まった。クリトリスに受けた刺激が引き金になった。

尿は、秘唇のすぐ下でまっわっているショーツに当たって薄い布を透過させ、太腿を伝って下のほうへと落ちていく。

——恥ずかしいっ、恥ずかしいっ。いや、もう、死んでしまいたいっ！

とめようとしたのがまずかったのか、尿は、驚くほど長い時間をかけて出た。やがて尿はとまったが、膀胱は空っぽになってしまっても、おトイレに行ったときのようなスツキリした感じはなく、身体の奥がムズムズと熱い。

排尿が終わったとき、熱い衝撃が身体の奥を突き抜けた。目の裏がカッと白く発光し、なにも見えなくなるような、重力がなくなつて身体がフワッと浮くようなそれは、羞恥の極みでやってきた強烈なオーガズムだった。

みちるは、小さな顎をあげ、白い喉をさらして、ああ、と熱い吐息をついた。

「おい」

「ああ……」

車内に、騒然とした気配が漂う。

皆は、二人を怖そうに遠巻きにしながら、ちらちらと視線を投げかけている。

みちるは、視線のただなかで、甘い陶酔に浸っていた。

いきなり、ドアが開いた。無我夢中でわからなかったが、いつの間にか次の駅に着していたらしい。

「みちるっ。行こうっ！」

圭祐が、みちるの手を引いてホームを走りだす。みちるは、大好きな少年に引張

られるまま、まろび走った。

「ここ、入っでいて」

圭祐がドアを開けたのは車椅子用のトイレだった。

思考力の低下していたみちるは、言われるままにトイレに入った。

つづけて圭祐が入ってきた。幼なじみの少年は、ほっとした顔をしながら、後ろ手にドアを閉めた。

——これは漫画なの。現実なの？

バカみたいと思いつながら読んでいた圭祐のエロ漫画。好きでもない男に奴隷調教を受けたヒロインが、電車内で痴漢され、興奮している話があった。

ヒロインは、相手の男性になんと言っていたのだったか。そう確か……。

「ご主人様。私はあなたの奴隷です」

——えっ？ みちる、今、な、なんて言った？

「命令してくださいませ。どんなことでも致します」

驚いて顔を見る。みちるは、セクシーな表情を浮かべていた。

「マジなのか？」